

# おやふるむら 生振村愛知県団体移民

愛知県から団体で生振に入植した人たちは、愛知県団体と呼ばれ、生振地区の開拓史に画期的な足跡を記しました。

明治24（1891）年の濃尾大地震の被害をうけた愛知県3郡（東春日井、西春日井、丹羽）の農民達は、北海道移住を決意して、明治26（1893）年、16ヶ条の「愛知県団結移住者規約」を結びました。翌27年旧暦4月15日（新暦5月29日）、56戸320人が、西生振原野に入植しました（図参照 総面積277町歩、1戸あたり約5町歩、1町歩は10,000m<sup>2</sup>）。

しかし、樹木と熊笹の生い茂った原野の開拓は容易ではなく、初年度は、1戸平均5反歩（1反歩は1,000m<sup>2</sup>）ほどの作付けしか出来ませんでした。収穫は、ソバ、バレイショ、インゲンマメなど5～10俵（1俵は60kg）で、越年も難しいありさまでした。日常の食べ物といえば、三度三度、従兄弟煮というソバ、イモ、豆のごった煮ばかりでした。

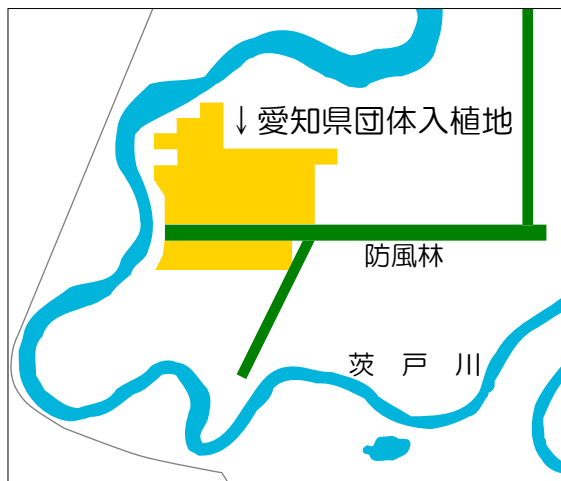
2年目は、出稼ぎに出る家も多く、余裕のある者が低利で融通して仲間を助けました。食料や農具なども札幌の商人から借り受けたのです。この年は各戸1町2～3反歩の作付けをしましたが、夜盗虫（ヨトウガの幼虫で野菜類を食害する）の被害で、一層の困難を極めました。

3年目の明治29（1896）年に、ようやく十分な収穫があり、30年には初めて収穫の一部を販売して、出稼ぎもなくなりました。

この間、移住の年に村内3ヶ所に祠を造って天照大神を祀っていましたが、明治34（1901）年にこれらは合祀されて生振神社となりました。また、移住の翌年には、学校を建て、子供達の教育も行いました。これが後の生振小学校となります。

明治31（1898）年には大洪水があり、苦しめられました。明治33（1900）年、全ての家が、全地の開墾をなしとげたのです。その後は、洪水などもありましたが、肥沃な沖積土壌にも恵まれて順調に推移し、養鶏も行い、全道有数の優良部落となりました。この愛知県団体の成功は、団結が固く常に相互扶助を貫いたことと、長江常三郎、佐藤安次郎などの良きリーダーがいた事によるものでした。

（石井滋朗）



(1) 石狩町（1985）石狩町誌／中1．石狩町。

(2) 生振村愛知県団体開拓百年史編集委員会（1993）生振村愛知県団体開拓百年史．愛知県団体開拓百年記念事業協賛会。

(3) 山地肇治（1992）生振開村百二十年．生振開村百二十年記念事業協賛会。